

(図中左上の囲みの中の文字)

見渡せば、野の末、山の端

までも、花なき里そなかり

ける、今を盛りに咲揃ふ、色

香愛たき其花も、過ぎ越

し方を尋ねれば、憂き事のみ

ぞ多かりき、霜降る朝には

葉を隕し、雪降る夜には

枝を折り、枯れしとまでに眺

められ集り会ふ憂事の、

積りくし其中を耐忍びし

甲斐ありて、長閑き春に

巡り逢ひ、斯く咲き出る

ぞ愛たけれ、世の為にとて

誓ひてし、其身の上に喜び

の、花の荅は憂き事と、知り

なば何か憾むべき春の花

こそ例しなれ春の花こ

子愛^{ゆき}たけれ

辛卯初夏
木村武之佐書